

## 西周金文通読稿 (2)

両周金文研究会

### 2、小臣單觶 (『集成』6512、上海博物館蔵)



小臣單觶 (上海博物館ウェブサイトから引用)

<https://www.shanghaimuseum.net/mu/frontend/pg/article/id/CI00000595>

#### 【出土】

不明。伝世器である。

#### 【時代】

『考釈』は「本器は武王が商に克った時の器である」といい、武王期の作器とする。これに対し、『批注』は「成王期の器」とし、より時期を限定して「周公摂政の時」ともいう。『銘文選』も成王期とする。

本稿は、成王期とする断代に従うが、「用作寶 隣彝」までの銘文は、過去の克殷の際の出来事を回顧したもの(追述)と考える。

#### 【器制】

『銘文選』…高 13.8 cm、口縦 9.3 cm、口横 11.6 cm、底縦 8.1 cm、底横 10.3 cm

『銘図』…通高 13.8 cm、口径 9.3 cm×11.6 cm、重 0.75kg

觶は飲酒器の一種で、蓋をともなうものもある。胴部の断面形は円形、楕円形、略方形を呈するものがあるが、本器はややひしゃげた楕円形につくる。ゆるやかに外反する口からなだらかな曲線を描き、下腹部はやや張る。圈足がつき、端部は肥厚していわゆる方唇状をなす。頸部には紋様帯が一周めぐり、後ろを振り返る姿の龍紋がほどこされる。

林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究 殷周青銅器綜覧一』(吉川弘文館、1984年)は本器のようなタイプの觶を「三型」に分類し、胴部の「側視形」の変化に着目して編年を試みている。すなわち、口縁から底

部にかけての「曲線の硬直化、最大径の位置の下降」を型式変化の基準とみなし、本器を西周 I A に位置づけている。

本器を西周前期に編年するのはおおむね妥当な見解と思われるが、それ以上に製作年代を細かく比定することは難しい。ただ、本器の下腹部がやや張った形状、あるいは頸部にほどこされている龍紋の特徴からして、殷末周初よりも年代が下る可能性は高いと考えられる。器制に見られる特徴は、銘文内容を根拠とした時期比定のうち、『批注』のいうようにひとまず成王期とする説を支持する。

### 【釋文】

王後取（反）克商<sup>(1)</sup>。

才（在）成自<sup>(2)</sup>、周公易（賜）

小臣單貝十朋<sup>(3)</sup>。用

乍（作）寶<sub>障</sub>彝。

### 【訓読】

王、後に<sup>ついで</sup>商に<sup>うちか</sup>反克つ〔年〕。成自に在りて、周公、小臣單に貝十朋を賜う。用て寶<sub>障</sub>彝を作る。

### 【注】

(1) 王を武王とするか成王とするかで「克商」の解釈も分かれる。武王であれば克殷（いわゆる殷周革命）のことであり、成王であれば清華簡『繫年』第3章にいう「成王屎伐商邑」のこととなる。本稿は、上述のように武王克殷のことと考える。近年でも、谷秀樹「周王の所在地の変遷について—西周王朝における2つの王統一」（『立命館文学』第637号、2014年）が、「周公については、周公廟甲骨に事例が見えるほか、小臣單觶銘（前期 [6512]、I A）では克殷に従軍しており、……」（注42、1399頁）という。取（<sub>取</sub>）について、『考釈』は「坂字で、反もしくは叛の假借である」とし、武王が文王紀元九祀（武王2年）に東方で閔兵して孟津に至ったものの撤兵し、十一祀に孟津を渡って商に克ったことに基づいて、武王は二年後に軍を反して商に克ったの意に解する。これに対して、『批注』は「<sub>取</sub>は坂とまったく同じところがない」と『考釈』の字釈を批判し、<sub>取</sub>は韋伯取殷（『集成』4169）が<sub>取</sub>に作る字（取）と一字と考えて、両者は同一人物であるという。『重新整理』も「本銘の<sub>取</sub>は、明らかに坂字と似ていない。この字は厂に従い土に従い又に従う会意字で、<sup>がけ</sup>厂の下に土を墮とすことを表す」（74頁）とあって、『批注』の『考釈』批判を支持する。『批注』のように、取を人名と考えると、<sub>取</sub>字の解釈が問題となる。この字が「後」であることは疑いない。したがって、この後字は、武王と取との関係、あるいは取が克殷にどのように関わったのかを表しているはずである。こころみに「王の後（後嗣）たる取、商に克つ」と読めば、武王と取との関係ばかりでなく、取が克殷にどのように関わったのかもはっきりする。そうではあるが、伝世の文献に武王の子として取・取の名は見えず、韋（庸または鄘）の地に武王の子が封じられたという伝承もない。そこで注目すべきが、李守奎「據清華簡《繫年》“克反邑商”釋讀小臣單觶中的“反”與包山簡中的“𠄎”」である。李守奎は取を反と読み、清華簡『繫年』

第1章の「以克反商邑、尊（敷）政天下」の解釈に基づいて、本銘や「伐反夷」「伐反虎方」「伐反荆」といった銘文の反字を「くつがえす、倒す」意とするのである。従うべきである。よって本稿では「商に反克つ」と読むことにする。ただし、李守奎は、本稿と異なり、「反克商」を成王による第二次克商（武庚の乱の鎮圧）のことと考えている。近年は、李守奎がそうであるように、この後字を第二次（武王克殷の後を継ぐ二度目）の意に理解することが一般的であるが、殷族（器主が殷族であることは後述する）にとって「反克商」と記すべき大事は、武庚の乱の鎮圧ではなく、いわゆる牧野の戦いであつたはずである。であれば、後字も、武王克殷たる「反克商」を修飾するにふさわしい字義でなければならない。もっとも、「王後〇」という表現は今のところ本銘にしか見えない。しかし、この「王後〇」が、西周金文に散見する「王初〇」と対の表現であるならば、後字を「とうとう、やっと」の意に読むこともできよう。そこで本稿では「王は後に商に反克つ」と解することにする。また別に、時代は下るが、『商君書』境内に「死則一人後〔死すれば則ち一人後ぐ〕」とあり、この後字が継承する意であることに基づいて、「王は〔文王の業を〕後いで商に反克つ」と解するのがよいという意見もある。

(2) 成について、『考釈』は成阜（成牟）のこととし、「古くは軍事拠点であり、孟津にも近い」というが、『批注』は成周のこととする。『銘文選』も成周と考える。また『考釈』は、自について「師旅に関わることが多く、かつては師と考えたが、馭觶・邁觶・稽卣などのように銘文に師と自がともにあらわれる例があるので、自を師とするのは正しくない」といい、後の屯字と考える。『通釈』は『考釈』の説を斥けて師旅（軍隊）のこととする。『批注』は「やはり師と読むべきである」といい、また「自と屯とは音が近いので、『考釈』の解釈でも通じる」ともいう。後者について『整理稿』は「西周金文の自は師の意味と音で読むのが正しい」と注している。たしかに自は師の初文である。ただし、「〇自」の自は、軍隊そのものを指す場合と、軍の駐屯地を指す場合とがあるので、『批注』が後者のように言うこともあながち間違いではない。本稿では「成自」を成周に設けた軍営と考える。ただし、銘文中に成周の名が見えるからといって、周公が小臣單に貝十朋を下賜した地を武王期にすでに成周と呼んでいたわけではなく、この器を制作した（銘文を起草した）とき（周公摂政期）にはその地を成周と呼ぶようになっていたと考えるのである。

(3) この周公は『銘文選』『通釈』がいうように周公旦であろう。小臣單が器主である。周公旦が成周の軍営で小臣單に貝（タカラガイ）を下賜していることから、小臣單が殷族であり、「反克商」の軍事行動にそれなりの役割を果たしたことは疑いない。そこで『通釈』は、小臣單を周公旦の指揮下にあつた成周庶殷と考えるのであるが、小臣單が周公旦の直接の指揮下にあつたかどうかははっきりしない。周公旦は武王の名代として功のあつた者をつぎつぎに褒賞しているにすぎないと考えることもできるからである。なお、『批注』は貝十朋に注目して、蔡尊（『集成』5974）の銘文を「王才（在）魯魯（似幸字）錫貝十朋（合文）對對王休用乍宗彝」と引用する。

#### 【日本語訳】

武王がとうとう商を倒した年のこと。いま成周と呼んでいる地の軍営で、周公旦が小臣單に貝十朋を下賜した。そこで小臣單はこの寶寶彝彝を作ることにした。

### 【著録】

『綴遺』 24.15 『貞松』 9.29.1 『小校』 5.97 『三代』 14.55.5 『通考』 344 『断代』 3  
『史徵』 5 『通积』 9 『銘文選』 25 『青全』 5.118 『上海』 (2004) 249 『集成』 6512  
『銘図』 10656

### 【略称】

『考积』 = 郭沫若『兩周金文辭大系考积』文求堂、1935年（『増訂本』科学出版社、1958年）  
『銘文選』 = 馬承源主編『商周青銅器銘文選』第3卷、文物出版社、1986年  
『批注』『整理稿』 = 張政烺著・朱鳳瀚等整理『張政烺批注《兩周金文辭大系考积》』中華書局、2011年  
『重新整理』 = 郭理遠「《張政烺批注〈兩周金文辭大系考积〉》の重新整理與初步研究」復旦大学碩士論文、2014年  
『銘図』 = 吳鎮烽『商周青銅器銘文暨図像集成』上海古籍出版社、2016年  
『通积』 = 白川静『白川静著作集 別卷 金文通积 1 [上]』平凡社、2004年

### 【近時主要研究】

- 李学勤「讀《繫年》第三章及相關銘文札記」（『出土文献』第4輯、李学勤主編・清华大学出土文献研究与保护中心編、中西書局、2013年）  
→李学勤『夏商周文明研究』（商務印書館出版、2015年）に所収。
- 李守奎「據清華簡《繫年》“克反邑商”釋讀小臣單觶中的“反”與包山簡中的“𠄎”」（『簡帛』第9輯、武漢大学簡帛研究中心編、上海古籍出版社、2014年）  
→李守奎『古文字与古史考——清華簡整理研究』（中西書局、2015年）に所収。

### 【参考】上海博物館ウェブサイト

<https://www.shanghaimuseum.net/mu/frontend/pg/article/id/CI00000595>

時代：西周

詳細年代：西周早期

類別：銅器

進階類別：酒器・礼器

尺寸：高 13.9 厘米、口縦 9.4 厘米、口横 11.6 厘米

材質：銅

外觀形式：觶

工芸：範鑄法

来源：李蔭軒・邱輝 1979 年捐贈